

# 上代假名遣ひから見た邪馬臺國の擬定

大 森 志 郎

## 一

魏志は二千字を用ゐて日本のことを記してゐるので、そのなかには日本語を漢字で書いたものが含まれてゐる。漢字の六書でいへば假借、今日の中國語で對音といはれるもの、日本で萬葉假名といつてゐる用ゐ方である。

漢字はいはゆる表意文字であるから、形・音・義の三つの要素を備へてゐる。字形はいま問題ではない。字音と意義との二つのうち、意義をすてて音だけを用ゐたのが假借で、早くいへばアテ字である。漢字によつて外國語を書きあらはすには、昔も今も、この外に方法はない。表意文字の表音的な使用方法である。いまわたくしたちの用ゐてゐる、巴里だの、紐育だの、倫敦だのといふ地名の書き方は、この對音表記であり、數學で幾何といつてゐるのも、geometry の geo にあてた假借の文字である。中華料理のメニューに何何吐絲とある吐絲は toast の對音である。日本人の女性の名まへを漢字で記すものには、この萬葉假名書きのものがしばしば見られる。

對音表記はこのやうに、地名・人名などの固有名詞と、譯しにくい外國の語・音を書き記すときに用ゐられるが常であつて、魏志の倭人傳が、當時の日本語を漢字で記してゐるのも、その範圍である。魏志にあらはれてゐる日本語のすべてを、次にあげる。

倭	國	名 (地名)
狗邪韓	對馬	一支
		末盧
		伊都
		奴
		不彌
		投馬
		邪馬臺
		斯馬
		已百支
		伊邪

郡支 彌奴 好古都 不呼 姐奴 對蘇 蘇奴 呼邑 華奴蘇奴 鬼 爲吾 鬼奴 邪馬  
 躬臣 巴利 支惟 烏奴 奴 狗奴  
 狗邪韓の韓は對音ではないであらうがそのままあげる。一支は原本に一大とあり、邪馬臺は邪馬壹とあるが、一支、邪馬臺の誤であることはすでに定説となつてゐるから、さう改めておいた。倭といふのは對音であるかどうか疑ふ説もある。奴國は同じよび名の國が二つあつたと認められる。

## 官 名・人 名

卑狗 卑奴母離 爾支 泄謨觚柄渠觚 兕馬觚 多模 彌彌 彌彌那利 伊支馬 彌馬升  
 彌馬獲支 奴佳靺 狗古智卑狗 卑彌呼 難升米 都市牛利 伊聲耆掖邪狗 卑彌弓呼素 載斯  
 烏越 壹與

官職の名と認められるもののうち、大夫と持衰とは、日本語の對音ではないと考へられるから除いた。この二つの言葉は、意味をもつた漢字として使はれたもので、日本人の官・職の名ではあつても、日本語の音を寫したものではないからである。壹與は臺與の訛であらうといふ説が有力である。

泄謨觚柄渠觚は二つの官名と見る説もあるが、さう認めなければならぬ積極的な論據が不明であるから、一つの名辭と見ておく。卑彌弓呼素は、卑彌弓呼が人名で、素はモトといふ意味の普通の言葉だといふ説もある。耆の字は日本書紀には者となつてゐる。

大倭監之、一大率といふのも職を示してはゐるが、官職名ではないし、對音でもないから、擧げない。

## 噫

固有名詞と官職名以外の對音は噫といふ文字が一つだけ記されてゐる。對應之聲曰噫、とある。

これらの名辭に訓みをつけることは、しばしば行はれて來た。訓みがわからなければこれらの國名や官職名人名を擬定

することができないからである。

ここに用ゐられてゐる一字一字が日本語のどういふ音をあらはしてゐるかがわかれば、訓みは定まり、あてられた日本語はわかるわけであるが、逆に、あてられた日本語がわかれば、あらはしてゐる音がわかることにもなる。かういふ堂々めぐりとなり、循環論證に陥るのは、魏志に限つたことではないが、この際、音と文字との對應を定めるのには慎重な用意が必要で、その方法が學問的な嚴密さを欠くと、あて推量の域を出ないことになる。

たとへば岩波講座日本歴史のなかの一篇のやうに、字音と字訓とを交へてよんで、すべての名辭に訓みをつけてゐるが、その音訓の擬定法に何の説明もない、といふやうなのは、すゐぶんと勇ましいことである。魏志のできた三世紀のころに、日本人がすでに漢字を訓讀してゐたといふ説は、國語學者の側からは未だかつて耳にしたことはない。日本人が日本の地名や人名を漢字で記す習慣がこのころにすでに起つてゐて、それを漢魏時代の中國人が教へられて歸つたとしてもいふのでなければ、音訓混用の日本語表記は起りようはないはずであらうに。

ここにあげた名辭のうち、今日でもそのまま通用するのは對馬<sup>ツシマ</sup>だけである。一<sup>イチ</sup>支は、支の字の草體が平安時代の草假名に多く用ゐられてゐるし、その位置から推しても、イキであることは明らかであるが、文字は今日では壹岐と書いてゐる。一と壹とは通用するが、岐といふ文字は古くは濁音(ぎ)に用ゐたものである。

それ以外で、訓みもほぼわかり、地名の擬定も大きな異説のないのは、北九州の、

末盧(松浦) 伊都(怡土) 奴(儺) 不彌(宇美)

ぐらゐなもので、邪馬臺は訓みには論はないが、大和説と九州説とが對立してをり、卑彌呼、臺與といふ人名も、訓みは大きな異説はないが、日本の古史に見える人名との對應で、論はいくつにもわかれてゐる。

今日、魏志にあらはれてゐる日本語の對音表記のすべてに嚴密な訓みを與へ、正確な擬定ができる、と言ひ切れる人は、まづあるまいと思ふ。今日まで全部を訓んでゐるのは、おほかたかうだらう、といふくらゐの推定であつて、人によつてまちまちになるのは、むしろ當然であつた。

だが、次のことはいへる。

これらの日本語の對音を記してある漢字は、すべて音にあてて用ゐられたものであつて、訓でよむべきものは交つてゐない。

しかし、三世紀の漢字の音といふものは、實はわかりかねるのである。國語學の專攻の方には知れきつた事であるが、倭人傳を論ずる人人のなかには國語畠の方は稀であるから、以下すこしく、文字と音韻とについて述べる。

日本で用ゐてゐる漢字の音は、普通に、吳音・漢音・唐音（宋音）とよばれてゐる三種類があり、この順序に用ゐられるはじめ、一つの漢字に三種類の異つた音のついてゐるものもある。吳や漢は地名であつてここでは王朝名ではない。大陸で五胡十六國の亂れのち、南方の吳の地にかへつて古い音が残り、中央の漢水地區に新しい音が生れたので、吳音漢音を南方音・北方音といふこともあるが、吳音は漢音よりも古い時代の中央の音を傳へてゐる。日本では佛經の讀誦には吳音を用ゐ、漢籍のよみには漢音を用ゐる例である。漢音は隋唐時代の中國の官場用語の音であつたので、日本の政府もその國際性を重くみて、吳音に代へて漢音を採用したのである。しかし今日われわれの用ゐてゐる日常の言葉のなかには吳音によるものが少くはない。唐音宋音といはれてゐるのは元以後の新しい中國語音で、今この論とは關係はない。

漢音が隋唐の音であるから、吳音はそれよりも古い時代の音を傳へてゐるわけであるが、中國のどの時代の音と認むべきであらうか。中國での漢字の發音は時代によつて變つて來てゐるが、その發音を表で示した韻書の古いものである魏の李登の聲類、晉の呂靜の韻集などは早く迭して傳はらず、いま用ゐられてゐる韻鏡は、唐末か五代の頃にできたもので、日本でいふ漢音をあらはしてゐるにすぎない。さうしてカール・グレーンの中國古韻の研究さへ日本の古典を用ゐて推定を試みてゐるほどで、日本人がその時代時代に漢字を用ゐて記した文献が、かへつて中國の古音を知る資料となつてゐるくらいであるから、それよりも古い時代の音韻を推定することはすゐぶんと困難な仕事である。

日本の古典のうち、古事記の假名は吳音で用ゐられ、日本書記の假名は漢音で用ゐられてゐる。古事記の成つたのは七二二年、日本書記の成立は七二〇年で、そのあひだ八年より隔つてゐないが、古事記は古くから用ゐて來た吳音に據り、日本書記の編纂には、外國へ示すといふ意識が加はつてゐたので、當時の國際音である漢音を用ゐたものであらうと思はれる。

ところが日本で古く用ゐられた字音をみると、漢音ではなく、吳音でもないものがある。今日の「つ」「ッ」といふかなの字源は「川」と思はれるが、川の漢音吳音からはツといふ音は出て來ない。水の字をシの音に用ゐ、里の字をロの音にあて、巷の字をソの音に使つてゐる例のあるのも、同様である。これらは、吳音よりもさらに古い音を傳へてゐるらしく、推古時代の金石文などに用ゐられてゐる。これを周代の音が残つたものとして周音説をたてた人もあるが、周代の音と見るのは武斷にすぎ、その時代には日本と中國との交通もない。交通史を考慮に入れるならばむしろこれらが漢魏時代の音を傳へてゐるのではないかと思はれないでもないが、證明することは困難かも知れない。いづれにしても日本でその音が表記されたのは大かた六世紀の末から七世紀にかけてのことであるから、魏志の三世紀とはかなりに時間の隔りがあるし、その種類の音を傳へてゐる文字の數もごく僅かである。

史料なければ歴史なし、で、嚴密に言へば、魏志が書かれた時代の漢字の音は詳しくはわからないのであるが、さう言つて捨てておくわけにはゆかないので、この場合、變つたといふ證據がなければ變らなかつたものと考へておく、といふ推理の原則を適用する外はあるまい。この次善の策においては、いはゆる古音と吳音を以て漢魏時代の音に最も近いものと認めることになる。

## 二

日本でいふ古音・吳音・漢音であるが、それらの字音（および和訓）を用ゐて漢字で日本語を記してゐた時代——片かな、平かなの成立する前——の日本の古典の漢字の用ゐ方を検討すると、五十音圖では説明できない現象が見出される。

このことにはじめて氣づいたのは本居宣長で、宣長は「古事記傳」の卷一、假名の事の條に、

さて又同音の中にも、其言に隨ひて用ふる假名異にして各定まれること多くあり。其例をいはば、コヒコの假名には普く許古二字を用ひたる中に、子コには古の字をのみ書て許の字を書くことなく（彦壯子ヒコヲコなどのコも同じ）、メの假名には普く米賣の二字を用ひたる中に、女メには賣の字をのみ書て米の字を書くことなく（姫處女ヒメヲメなどのメも同じ）、……此の類の定まりなほ餘にも多かり。……凡て古語を解く助となることいと多きぞかし。

と説いた。彼の門人石塚龍麿は、師の説によつて、古事記・日本書紀・萬葉集に用ゐられた假借の漢字のすべてを集めて





ど日本人がみづからの言語を寫したものは異つた條件のもとに行はれたといふことである。

漢字は彼らの言語を表はすために發生し發達したものであるから、中國語と日本語との音韻の差、——母韻組織が違ひ子音の種類が違ひ四聲五聲の別をもつてゐる彼らの耳に、日本語が相當に訛つて受取られたであらうことは疑ない。今日、歐米人が日本語を發音する場合、あるいは、日本のカナで歐米の言葉を記す場合を考へれば、このことは思ひあたる。それも、時代によつて聽き方も變つて來る。日本化した外來語でLとRとが區別のないことは變らないが、今日ではFやVはほぼ正確に發音もされ表記もされてゐる。明治時代の日本人が Dr. Hepburn をへボン博士と唱へてゐたやうな、自國語の音韻にひきつけた聽き方、表はし方が魏志の場合にもありうると考へられよう。

參考のために第二次大戰中に滿洲で出版された、通俗な「日語話本」といふものから例をあげてみる。これは一般の中國人のために中國人が作つた日本語會話の速習本の一つで次の表に示したAの中國語にBの表音による日本語をあててある。Aの意味を日本語で言ひあらはすにはBのやうに發音すればよい、といふ對音譯である。ここでは、Cにその對音を普通行はれる方法でローマ字化して示し、DにそのBCがあらはしてゐる日本語をつけ加へておく。

A	B	C	D
一個	洗豆子	(Sietou-tzu)	ヒトツ)
二個	附達子	(Fu-ta-tzu)	フタツ)
三個	尼子	(Ni-tzu)	ミツツ)
四個	姚子	(Yao-tsu)	ヨツツ)
五個	一直子	(I-chi-tsu)	イツツ)
豆	馬米	(Ma-mi)	マメ)
洋火	麻吉	(Ma-chi)	マッチ)
刀	好召	(Hao-chao)	庖丁)
牛肉	九你古	(Chiu-ni-ku)	牛肉)
香	申告	(Shen-kao)	線香)



このローマ字化は北京官話によるものであるから、現地の土語の發音とは少し異つてゐるが、それにしてもDの日本語を日本人がローマ字化したときと、いかに異つて來るかは、明らかであらう。そのうへ、實際に發音されるときは、これに四聲の別が加はつてなほ曖昧なものになつてしまふのである。

第二に考慮すべきは、先に記した、三世紀の漢字音が明確にはわからないこと。第三には、表記が一字一音とは限られないことである。一字一音と限らぬといふのには二つの場合がある。對馬の對のやうに、一字で二つの音をあらはしてゐる場合と、同じ文字が二つ以上の別な音の表記に用ゐられることとである。日本人がLもRもU行のカナで書くやうに、違つた音が同一文字で書きあらはされることは、外國人が外國文字で表記する場合には、起りやすいのである。

第四には、用ゐられた漢字のあらはす日本語の音をすべて推定あるいは擬定することが可能かどうかといふ問題がある。ことに甲類乙類の假名の區別は、使用された實例から推してゆくのであるから、文字についても、言葉についても、手がかりがなくてわかりかねるといふ場合が起りうる。いや、あらゆる日本語がすべて萬葉假名で書き残されてゐるわけではないから、甲類乙類の區別のはつきりわかる日本語の方が少いと言つてよいであらう。

それにもかかはらず、甲類乙類の假名の書きわけといふ關所を通することは、古語の吟味には絶対に必要であり、魏志の倭人傳に見えてゐる日本語もまた、例外ではありえないのである。

それで、先づ、萬葉假名として實際に用ゐられたもの、——すなはち、奈良時代までに日本人が書き記した文献にあらはれてゐる漢字のうちで字音で用ゐたもの——と、魏志の倭人傳の日本語を書きあらはしてゐる漢字、とを對應させてみると、次の表のやうになる。

ア	イ	カ
伊、壹	支、耆	
ウ	ク	
エ	ケ	
オ	コ	
	(濁) 吾	
	渠	

サ (濁)邪	シ 斯	ス 素	セ	ソ 蘇、素
タ 多	チ 智	ツ 都	テ	ト 都 (濁)奴
ナ 難	ニ 爾	ヌ 奴	ネ	ノ 奴
ハ (濁)巴 馬	ヒ 卑 (濁)彌	フ 不	ヘ	ホ
マ 馬、末	ミ 彌	ム	メ 馬	モ 謨(甲乙 不詳)
ヤ 耶(邪)	ユ	ユ	メ 米	も 母
ラ	リ 離、利	ル 盧	レ	ヨ よ 與
ワ 倭	ヰ 爲	エ	ヲ 呼、烏	ロ ろ 盧
鳥 ウ、ヲ	耶 ザ、ヤ	素 ス、ソ	都 ツ、ト	奴 ド、ヌ、ノ
彌 び、ミ	盧 ル、ろ			馬 バ、マ、メ

このなかで一字數音に用ゐられてゐる文字をあげると、次の八字ある。  
彌の字は飛鳥時代の古文にはメにあてて用ゐた例もある。

この字音圖を用ゐて、倭人傳の地名をよんでみよう。右の音圖に出て來ない漢字は、甲類乙類の區別とは關係がないか、萬葉假名から直接には判別できないかどちらかであるから、漢字のままで書いておくことにする。

倭  
ワ

狗邪韓 狗ヤ韓、狗ザ韓

對馬 對マ、對メ、對バ

一支 イキ

末盧 末ろ、末ル

伊都 イト

奴 ヌ、ド、ノ

不彌 フミ、フビ

投馬 投マ、投メ、投バ

邪馬臺 ヤマと、ヤメと、ヤバと

斯馬 シマ、シメ

已百支 イ百キ

伊邪 イザ、イヤ

郡 郡キ

彌奴 ミヌ、ミド、ミノ

好古都 好コツ、好コト

不呼 フヲ

姐奴 姐ヌ、姐ド、姐ノ

對蘇 對ソ、對ス

蘇	奴	ソヌ、ソド、ソノ
呼	邑	ヲ邑
華奴蘇奴		華ヌソヌ、華ドソド、華ノソノ
鬼		鬼
爲	吾	キゴ
鬼	奴	鬼ヌ、鬼ド、鬼ノ
邪	馬	ヤマ、ヤメ、ヤビ。ザマ、ザメ、ザビ
躬	臣	躬臣
巴	利	ハリ
支	惟	キ惟
烏	奴	ウヌ、ウド、ウノ。ヲヌ、ヲド、ヲノ
奴		ヌ、ド、ノ
狗	奴	狗ヌ、狗ド、狗ノ

この地名のよみは、音韻の甲類乙類の區別を日本の古典にあらはれたものに據つて分けたことになる。倭人傳に見えてゐる地名のなかで、萬葉假名の實例から直接に音韻の區別を判別できるものはこれに盡きる。

ただし資料を逆に使つて、倭人傳に奴國と書いてあるのは、後世日本で、儼の縣といひ、那の津とよばれた土地にあたるから、奴といふ字はナといふ音を示すのに用ゐられてゐる。卑奴母離といふ表現も日本語のヒナモリにあてたものであらうから（上代假名づかひからは、ヒナモリにあてたといふ説は困難である。倭人傳の母の字は乙類もであるが、マモルといふ意味のモルは甲類モである）これも奴の字をナに用ゐてゐる。末盧といふのは、松浦であること間違ひはないから、盧の字はロではなくして、ラの音を示すのに使はれてゐる。それゆゑ、奴の字や盧の字の含まれる魚韻の文字は、この時代には○韻ではなくしてa韻であつたであらう、といふやうな論のたて方もできる。しかし今ここで問題としてゐるの

は、萬葉假名の甲類乙類の區別による倭人傳の表記の検討であつて、漢魏時代の音價そのものではないから、このような推理法には立入らない。循環論法に陥るのを避けるためでもある。

#### 四

倭人傳に用ゐてある文字をこのやうに甲類乙類にわけて上代の音韻についての發音の違いを明らかにしておいて、それを日本の古典に用ゐられてゐる上代假名遣ひによる表記と比較してみるとどういふ結果が出て来るであらうか。――

對馬は、今日も同じ文字で記してゐるから問題はない。國造本紀には津島と見えてゐるのは意味によつて書いた表記法である。

一支は、日本の古典には壹伎、以伎、伊吉、田吉と書かれ、支・伎・吉いづれも甲類キで、一致する。

末盧は、假名として所見がない。松浦にあたること明らかで、國造本紀には末羅と見えてゐる。

伊都は、伊斗・伊靱・伊都・怡土と見えてをり、斗・靱・都・土いづれも甲類トであるから、一致する。

奴は、儼の津にあたるものと推定されてをるがa韻は假名の甲乙とは關係がない。

不彌の彌は、ミ・ビともに甲類であるが、この地名に擬せられてゐる宇彌（宇美とも）の彌・美も甲類ミである。このウミといふ呼稱が海の意味であるならば、海は宇美・宇彌と記されてをり、これも甲類ミである。

投馬の馬は、e韻のときは甲類であるが、從來この地に擬された地名にメとよむべきものはないから、甲類・乙類の審査には入らぬ。

邪馬臺は、臺が乙類とである。この三字をヤマトと訓むことには從來とも異説はない。そのヤマトといふ土地がどこであるかが問題とされて、倭人傳の論争の一つの焦點となつて來たのであるが、このやうに魏志の邪馬臺の臺は乙類とであることがわかるからには、これにあてられて來た地名の方の甲類乙類をしらべてみなければならぬ。近畿の大和の國であるといふ説を検するには、その大和が萬葉假名でどのやうに書かれてあるかをしらべることである。

大和は、倭の字を和の字にかへて、それに大の字を冠せて作つた表記法で、廣くは日本を意味し、狭くは近畿の大和の

國を指すが、言葉としては同じで、字音の假借で書かれたものがいくらかもある。

日本書紀の自註に、

日本此云耶麻騰

とあるのをはじめ、歌謡でも

野麻騰のおしのひろせをわたらむと (日本書紀、歌謡、一〇六)

は騰の字を用ゐてゐるが、古事記では

夜麻登のたかさじぬをななゆくをとめ (古事記、歌謡一六)

夜麻登はくのにまほろば (記、歌謡三一)

夜麻登べにかぜふきあげて (記、歌謡五六)

そのほか一貫して夜麻登と記してゐる。日本書紀の歌謡でも、

あきづしま野麻登 (紀、歌謡七五)

野麻登べにみがほしものは (紀、歌謡八四)

は登の字を用ゐ

麻摩苔はくのにまほらまたたなづくあをかきやまこもれる夜摩苔しうるはし (紀、歌謡二二)

あをによしならをすぎ、をだて夜莽苔をすぎ (紀、歌謡五四)

は苔の字を用ゐ

このみきはわがみきならず椰磨等なすおほものぬしのかみしみき (紀、歌謡一五)

あきづしま椰莽等のくにかりこむとなはきかずや——あきづしま椰莽等のくにかりこむとわれはきかず (紀、

歌謡六二、六三)

野麼等のをむらのたけにししふすと (紀、歌謡七五)

おほばこはひれふらすも耶魔等へむきて (紀、歌謡一〇〇)

には等の字を用ゐてゐる。

この、騰・登・苔はいづれも乙類とであるから、邪馬臺の臺の字と同じ類に屬し、邪馬臺國が大和の國であるといふ説は、上代假名遣ひによつて判別される上代の音韻の上では成立する。

参考のために、日本の古典に用ゐられてゐるトの清音の假名を示せば次のとおりである。

甲類〔ト〕

(音) 刀斗土杜度渡妬覩徒塗都圖屠

(訓) 外砥礪戸門利速聰

乙類〔ト〕

(音) 止等登鄧騰滕臺苔澄得

(訓) 迹跡鳥十與常飛

この甲類の文字、乙類の文字は、同じ類のなかでは通用するが、甲類と乙類との間では通用されることなく、はつきりと使ひ分けられてゐたのである。

邪馬臺を九州に求める説で對音の地名を擬してゐるのは、筑後國山門郡、肥後國菊池郡山門郷の二つで、言葉としてはいづれも山門である。筑後の山門郡は日本書紀に山門縣とみえ、郡が置かれてのちも山門と書かれて來たこと、讀史備要の國郡沿革一覽だけでも明らかである。その門の字は和訓、すなはち日本よみで用ゐられた甲類トである。肥後説も文字としてはおなじであるから、音もまた同じく甲類トである。

門・戸の意味のトといふ國語の萬葉假名の類例を求めるならば、

彌儼斗・彌儼戸(水門)、由羅能斗(由良の門)、西渡(瀨門・瀨戸)、於朋耆妬(大き門)、等能渡(殿門)

など、記されてをり、斗・戸・渡・妬、いづれも甲類トであつて、例外はない。

本居宣長が「國號考」に、大和の國のヤマトは山門の意味であらうと説いた語源説は誤であつた。但、本居は邪馬臺が山門郡あるいは山門郷であらう、とは言つてゐないこと周知のとほりである。

大和の場合は萬葉假名で書かれたものは例外なく乙類とで記され、山門のときには同じ意味のトも例外なく甲類トで書

かれてゐるといふことは、大和と山門とは上代の人人にとつては、異つた音と意識され、發音され、表記されてゐたといふことである。さうして、魏志の倭人傳以下、中國の史籍が邪馬臺と記してゐるその臺の字も乙類となのであるから、邪馬臺を山門郡あるいは山門郷にあてることが、上代の日本語の音韻の種類とその表記法に照らして成立しないことになる。いな、成立しないといふ消極的な事柄ではなくして、積極的に拒否され、排除されるのである。

日本書紀の編者たちが、魏志の邪馬臺國を大和朝廷と認めてゐたことは、隠れもない事實である。彼らが、邪馬臺國が大和であると認めたのは音韻の上でも正しいからであつて、上代の人たちが邪馬臺（ヤマト）は山門（ヤマト）であらうといふ説をきいたならば、その訛の甚しさに、おそらくは笑ひだすことであらう。

邪馬臺が大和ではないと言ひ出したのは本居宣長であつて、本居は大和朝廷の尊嚴を護持せんがためにこれを九州の熊襲に擬したのであつた。のちの九州説はすべてその輦に倣つたものであつて、近頃は熊襲説が薄れて他に求めるやうになつたにすぎない。

上代の假名遣ひに、「其言に隨ひて用ふる假字異にして各々定まれること多く」あるのを發見して、「抑此事は人のいまだ得見顯はさぬことなるを、已始めて見得たるに、凡て古語を解く助となることいと多きぞかし」と示唆したのも本居宣長であつた。

今や、本居の發見した上代假名遣ひの法則は、本居の説き出した邪馬臺九州説を否定することとなつた。おのれの鍛へた矛を以て、おのれの作つた盾を破る結果となつたともいふべきであらうが、筆者はおのれの盾を破るほどの矛を鍛へしめたこの先達の偉大さを思はずにはをれないのである。本居の國學の精神は「吾に従ひて物學ばむともがらも、わが後に又よき考の出で來らむには必ずわが説にな拘みそ、道を思はで徒らに我を貴とまむはわが心にあらざるぞかし」といふ、かの玉勝間の一文に明らかだからである。

邪馬臺國を九州に求める説がその大きな支柱を失ふならば、このあとに「遠絶にして詳にするを得べからず」として列擧された諸國を、九州内だけに求める諸説は一一とりあげるまでもないことになる。九州以外にそれらの國を求める説は



検討に價するし、官職名・人名についても同じ手続きによる選別が必要であるが、豫定の枚數も盡きたので、それらは、近く刊行する拙著「魏志倭人傳の研究」(寶文館刊行)に譲ることにする。

大和の國といふときのトが乙類とであることは、上代假名を採りあげたことのある人なら誰もが知つてゐる。甲類乙類といふ言葉こそ用ゐてゐないが、「假名遣奥山路」が江戸時代にすでにさう分類してゐるし、近くは濱田敦氏が「人文研究」誌で、大野晉氏が「上代假名遣の研究」その他で、そのことを指摘し、あるいは明示してゐる。しかし、これら國語學の人人は、史論に立入ることを避けてか、この假名の違ひ、音韻の違ひが大和說九州說を決定する論據となることには言ひ及んでゐない。筆者が國語學を専攻とはしないにも拘らず、あへて、假名遣ひを論ずるのは、古代研究は、國史・國語・考古といふやうな専門別に立籠らないことがむしろ望ましいと考へるからである。

筆者は、邪馬臺國の所在地をふくむ倭人傳の地名人名その他の日本語の検討が、今日に至つてもなほ、五十音圖を至上のものとするかのやうな段階にとどまつてゐるのを頗る遺憾とし、歴史研究が學問の名に價する水準を回復することを、わが國の古代學のために提唱したいだけである。

(昭和二十九年孟夏)

## Résumé

### The Location of *Yamato* in the Chinese Histories of the 3rd Century

By

Shiro Ohmori

The oldest record of Japan can be found in the historical writings by the Chinese in the 3rd century, in which we find the name of *Yamato* as the country of the Japanese people at that time. The location of *Yamato* has been a subject of discussion—whether it denoted the present *Yamato-nokuni* (Nara Prefecture) or the present *Yamato* in the northern part of Kyushu.

The present writer wants to reject the latter surmise as an impossible one, on the new ground of his own.

His ground is as follows: Up to the 7th century the sounds of the Japanese language were far numerous than those which we now find in the Japanese syllabary. There were 88 sounds, and the Japanese people could discriminate among them in hearing, speaking, and writing. According to the use of those sounds at that time, the sound of *to* in *Yamato* which denoted Nara Prefecture was different from that of *to* in *Yamato* which is supposed to have been the northern part of Kyushu. And the Chinese character of *to* which is found in the Chinese histories of the 3rd century corresponds to *Yamato* which denoted Nara Prefecture, but not to *Yamato* which denoted the northern part of Kyushu. The *to* in the latter had a different sound.